

御参加がありこちらも予想より盛大だったかと思っています。ここでは次回第2回 XAFS 討論会の世話人を引き受けて下さった渡辺巖さん(阪大理)からご挨拶をいただきました。また PF の独立法人化の話題が紹介されました。もちろんビームタイムがドイツのように有料化する可能もありユーザーも他人事ではありません。今のところどのような方向かわからないようでしたが、今後の議論に注目したいと思います。

そもそもこの討論会は XAFS 研究者が一同に集まって議論する場が国内にないということから始められました。国際会議は2年に一度開かれますが、私個人的には「日本人の方の研究は後で聞けばいいや」とつつい思いがちで、結局 PF でよくお会いする方々が実際どういうことをなさっているのか知らないままの状態が続いておりました。今回の XAFS 討論会では、遠方からもかなりたくさんの方々に参加いただき、概ね全ての御講演を拝聴できましたので、かなりのグループの方の最近のお仕事が把握できました点で、大変有意義であったと思っています。このことは、講演者の方々が、分野の全く異なる聴衆の方でもわかりやすいように解説下さったということに他ならないと思います。特に10分でわかるように講演して下さいました方々に厚くお礼申し上げます。

手前味噌ながら十分に目的は達成できたという前提で、反省点を申し上げたく思います。今回は何といても時間がなかったことからいくつかの不備が生じました。太田実行委員長が討論会を発起したのが5月ゴールデンウィーク明けで、開催のご案内を PF のメーリングリスト XSJ

で流しましたのが6月19日、本誌に折り込みの案内を入れていただいたのが講演申し込みメー切(7月15日)の直前でした。このように御案内が大変急でしかも限られた場所で行なえませんでした。特に講演に関しては、時間があればもっと増えたはずだと考えます。時期の選定に関しても、PF のビームタイムが始まる前ということも条件に、非常に限られてしまいました。化学会や物理学会が終ってすぐ後以外の日程が見当たりませんでした。結局分析化学会と重なってしまい、何名かの方々がこのため御参加できなくなったかと思っています。来年度は夏季に開催するのがいいのではないかと考えました。ただし、再来年は国際会議が夏季に赤穂で開催されますので、必ず夏季が可能かどうかはわかりません。今回は口頭発表のみにできましたので会場設営等は全く何も行なわずにすみしました。パラレルセッションを組むことは避けるのを念頭にしましたが、講演数がこれ以上増えた場合はポスターセッションを設ける必要が出て参ります。この場合予算や場所の点で再検討すべき点になるかもしれません。

本討論会は来年以降世話役持ち回りで年1度開催していく予定です。来年はモノレールができて大変便利になった阪大吹田キャンパスで開催されることになっています。皆様のご参加と XAFS 討論会のますますの発展を期待しております。

最後になりましたが、本討論会参加案内のチラシを折り込んでいただき、また、全講演のプログラムを掲載して下さいました日本放射光学会に厚くお礼申し上げます。

## ＜研究会報告＞

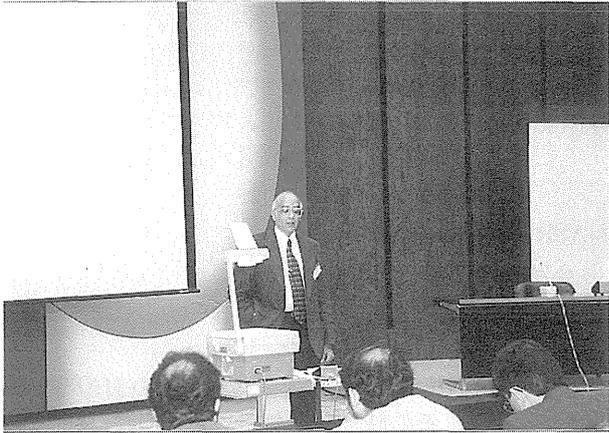
# 第2回放射光利用による材料科学国際会議 (SRMS-2) 報告

水木 純一郎 (日本原子力研究所)

10月31日から11月3日まで表題の国際会議が、神戸国際会議場で開催された。本会議は、放射光利用による材料科学の進展を主題とし、放射光による物質・材料特性の解明のみならず、新物質創製までを包含した実験的ならびに理論的検討を行い、この分野の研究の発展に大きく寄与することを目的としたものである。私は、この会議のプログラム委員長として関わったので主催者側および参加者側の両方の立場から会議の報告をする。ちなみに主催者は、日本原子力研究所、理化学研究所、JASRI、日本放射光学会である。

第2回と言うけれども実は、1994年に“European Con-

ference on Synchrotron Radiation in Materials Science”と題した会議がイギリスで開催され、これを発展させたものである。前回の1996年シカゴに続く第3回目の会議と位置づけられるものである。生物、医学関係を除く放射光利用のほとんどを包含するため、プログラム編成では非常に悩まされた。私を含め各分野から15名のプログラム委員が練りに練った結果、午前の前半はすべて plenary talk、それ以降は2つのセッションをパラレルで行うことを決めた。この結果、plenary talk の招待講演者は7名、各セッションでの招待講演者は27名となり、一般講演50件、ポスター発表123件を加えて、全参加者数287名であ



Opening Lecture をしている Dr. S. K. Sinha



ポスター発表風景

った。ちなみに地域別参加者は、欧州21名、アメリカ13名、アジア10名、ロシア10名、ブラジル3名、日本230名であった。

Opening lecture として APS の Dr. Sunil K Sinha をお願いし、60分という短い時間ではあったが、第三世代の光源がもたらした(もたらしている)材料・物質科学への寄与、今後の発展を非常にきれいに紹介してくれた。あらゆる分野でマイクロビームが必要になってきていること、これまでとは違って、放射光の coherence を利用した材料への応用、中性子散乱にも詳しい彼ならではの立場から X 線非弾性散乱の重要性とそれの進むべき方向等を最新のデータを示しながらすばらしい迫力で講演してくれた。他の plenary talk は、Prof. Margaritondo によるマイクロビーム光電子分光による半導体への応用、Dr. C-T Chen による軟 X 線 MCD とその磁性体への応用、Prof. Shiotani によるコンプトン散乱による金属フェルミ面の研究、Dr. Gibbs による X 線磁気散乱による磁性体、特に表面磁性の研究、Dr. Vladmirsky による X 線リソグラフィ技術を使った微細加工とその物質科学への応用、Prof. Nordgren による軟 X 線を使った発光分光とその材料科学への応用、であった。私の能力と紙面の制限で講演内容の詳細には触れないが、著名度だけでなくそれぞれの分野の第一線で活躍している現役の研究者が招待講演を受けてくれたおかげで、予想以上の参加者が集まり、また招待講演者に負けない発表が多くあったように思われる。

先にも述べたように、この種の国際会議はあまりにも分野が広がりすぎるので、それぞれの材料分野に特化した研

究会や会議が多い中、これらと比較して内容が散漫になり実りが少ないことを懸念したが、会議の期間を通してあちこちで深い議論がなされていたようである。招待講演者の幾人かは私に、彼らがいつも付き合っているコミュニティと少し異なるので講演する立場としても、また聞く立場としても新鮮で楽しいと語っていた。

ただ、実行委員の立場から反省点もある。第一に、せっかく企業の方々に努力していただいて企業展示を行ったが、そこを訪れる人数が非常に少なかった。場所は、メイン会場の向かいであったが本当に少なかった。通路、コーヒブレイク会場等に企業展示場所を設定すべきであったと反省している。第二にバンケット会場が狭かったこと、それに関係することではあるが、料理が少なかったことである。ひとえに参加者の見積もりが甘かったのである。

次回の会議、すなわち SRMS-3 は、会議期間中に開かれた国際アドバイザー会議で、2000年にドイツで開催されることが決定された。

ここまで書いてふと気が付くと、この報告は主催者側の立場だけからになってしまった。こうなるとその立場からもう一つ言うことを許してもらおう。この会議の収入源は、放射光学会を除く主催者と兵庫県、神戸市、残りは参加費である。企業からの寄付を一切おねがいしなくともお金の心配がなかったので非常に助かった。それだけでなく、会議に関わる事務的なことすべてを、SPring-8 の多くの方々が事務局となって処理してくれ、彼らの働きが計り知れなく大きかったことを述べておきたい。